

## 研究論文

# 共分散構造分析を用いた希望感の意識構造に関する調査研究

Studies on the Structure of Hope Using the SEM(Structural Equation Modeling)

江川 誠一\*

はじめに

- I. 希望感に関する意識調査結果
- II. 共分散構造分析による希望感の意識構造
- III. 分析結果の考察

おわりに

豊さを測る尺度としての経済指標の限界等により、国内外において新たな観点からの指標開発の必要性が論じられている。特に福井県は、統計指標からみた幸福度の高さが注目されるとともに、同県においては希望に関する施策研究が進められている。このような背景のもと、本研究は個人の希望感に焦点を当て、どのような個別の分野における希望感が総合的な希望感に強く結びついているのか、あるいはその傾向において地域や属性によりどのような違いがあるのか等について分析することを目的として行ったものである。福井県民及び首都圏住民に対して、希望感に関するアンケート調査を行い、その結果を用いた共分散構造分析により、希望感についての意識構造を明らかにした。

その結果、将来の希望感は今現在の幸福感をかなり下回っていること、希望感を構成する分野の軽重は首都圏住民と福井県民との意識においてやや異なっていること、希望感を構成する分野の軽重は年齢階層によって異なっていること、単身世帯の希望感は低いとともに単身世帯の希望感の意識構造は他とかなり異なっていること、教育分野は総合的な希望感との関連性が比較的薄くなっていること等が明らかになった。

**キーワード：希望，幸福，共分散構造分析**

---

\* 福井県立大学地域経済研究所

## はじめに

「国民生活に関する世論調査」(内閣府)によると、昭和50年代半ばを境に、心の豊かさを重視する割合が物の豊かさを逆転し、平成22年6月調査では、心の豊かさを重視する割合が物の豊かさを重視する割合の約2倍となっている。このように心の豊かさが問われるようになるなか、豊かさを測る尺度としてGDPに代表される経済指標が万能ではないことが指摘されており、国内外において新しい豊かさを測る指標の開発が検討されているところである。

我が国においては、新成長戦略の基本方針で「国民の『希望度』を表す新たな指標を開発し、その向上に向けた取り組みを行う」とされており、平成21年度の「国民生活選考度調査」(内閣府)は、新たな指標の開発に向けた一歩として、希望度をテーマに実施された。

一方で福井県は、自然が豊かで広い家に住み、女性がよく働く健康長寿の県という特徴を有しており、従来の指標では測れない豊かさも兼ね備えていると思われる。昨年11月に発刊された「日本でいちばん幸せな県民」<sup>1</sup>では、総合平均評点が全国1位となっている。同書による福井県への高評価は、統計指標面から見た福井県民の幸福度の高さを示したものであるが、実際に国民が感じる幸福度は一人一人異なる基準であること、幸福の構成要素はそれぞれ重みが違うものであること等から、統計指標からのアプローチに加えて、国民一人一人の意識構造からアプローチした幸福度や希望度に関する研究が必要であると考える。

以上のような背景のもと、本研究は統計指標ではなく一人一人の希望感に焦点を当てその構造を分析し、どのような分野における希望感が全体の希望感に結びつくのか、そしてこういった構造が福井県民と首都圏住民とどう違うのか等を把握することを目的として実施した。

I章では、希望感に関するアンケート調査の結果を考察する。II章及びIII章では、その結果を用いて共分散構造分析により希望感の意識構造を明らかにした。

## I. 希望感に関する意識調査結果

### 1. 調査の概要

希望感の意識構造を把握するためにアンケート調査を行った。設問は、総合的な幸福感と希望感を問うもの、24分野に渡る個別の希望感を問うもの、及び、差異を見るための属性により構成される。このうち、個別の希望感項目については、一人一人の生活を構成する領域として、仕事、家族、健康、教育、地域・交流、消費の6項目を定めた上で、それぞれについて細分化することにより設定した。また、福井県民の意識構造の分析を主しつつ、大都市住民と比較するため首都圏住民に対しても同様の調査を行った。(表1)

表1 調査の概要

調査目的	希望感に関する意識構造の把握
調査対象 (回収数)	楽天リサーチモニター会員 福井県民(1,200票)、東京都民(100票)、 千葉県民(100票)、埼玉県民(100票)、 神奈川県民(100票)
調査期間	2011年3月4日～7日
調査方法	ウェブアンケートによる配布・回収
調査内容	幸福感、希望感、個別希望感(24項目) 属性(性別、年齢、都道府県、健康状態、 世帯構成、世帯年収、就業形態、最終学歴、 社会活動参加状況の9項目)

総合的な幸福感については「現在の幸福感」、総合的な希望感については「将来に対する希望感」とすることでその違いを回答者に意識させた。個別の希望感については「将来の〇〇に関して、どの程度の希望感をお持ちですか」という聞き方を基本にしながら、自分自身のこととして全ての回答者が回答することが困難な設問については、「将来における社会全体の〇〇に関して、どの程度の希望感をお持ちですか」という聞き方にした。また、共分散構造分析では5件法・7件法を使用するのが一般的<sup>2)</sup>であるため、属性に関するものを除く全ての設問は7段階の得点化ができるような形式にした。

図1 アンケート票の設問例

<p>問. あなたは将来に対する希望について、「希望に満ちあふれている」を7点、「まったく希望が持てない」を1点とすると、どの程度の希望感をお持ちですか。(1つに〇)</p> <p>小 1 2 3 4 5 6 7 大</p>
<p>問. あなたは将来における社会全体の結婚環境(望む人が結婚できる環境)について、「大いに希望を抱いている」を7点、「まったく希望が持てない」を1点とすると、どの程度の希望感をお持ちですか。(1つに〇)</p> <p>小 1 2 3 4 5 6 7 大</p>

個別の分野別希望感項目は、前述のように「仕事」、「家族」、「健康」、「教育」、「地域・交流」、「消費」の6つの領域から構成され、それぞれの領域に3～5項目が含まれている。(図1) (表2)

本調査はウェブアンケート手法によるものであり、インターネット利用者の特性を反映し、回答者の構成は母集団と比較して男性や30代、40代に偏ったものとなっている。回収過程において年齢構成や性別についての割付を試みたものの、福井県民の高齢者層(特に女性)において十分なサンプルを得ることができなかった。また、共分散構造分析においてはローデータを直接に扱うとともに、分析対象の標本数を十分に確保することが必要であるため、重み付け等の手法により母集団の構成に近づけることは困難である。従って、本調査研究では特に性別や年齢構成の偏りに留意して分析結果を見ていく必要がある。

次項では地域別に比較したものを除き福井県民に対する調査結果を基本に分析を進める。

表2 希望感項目の構成

仕事	就業環境※	教育	初等教育※
	労働環境※		地域の教育力※
	社会的地位や役割		高等教育※
家族	仕事のやりがい※	地域・交流	生涯学習
	結婚環境※		社会活動
	育児環境※		地域への愛着※
健康	家族間会話	消費	治安※
	三世代コミュニケーション		災害への備え※
	健康状態		社会との接点
	健康的な生活		日常的な買物
	老後		非日常的な買物
	環境問題※		観光・レジャー

※将来における社会全体の希望感を聞いた項目

2. 調査結果

(1) 幸福感和希望感

現在の幸福感的平均値は4.41であり、中程度の幸福感である4を上回っている。一方で、将来への希望感の平均値は3.54となり、現在の幸福感をかなり下回っている。現在はやや幸福と考えているものの、将来の希望に関してはそれより低めに見積もる傾向となっている。希望を「具体的な何かを実現しようとする願い (a wish for something to come true)」<sup>3</sup>と捉えると、閉塞感の広がる社会経済情勢の中で、個人がこの具体的な何かを描き切れていない、もしくは実現が難しいと考えていることの表れと捉える事ができよう。

幸福感和希望感の関連性は高くなっており、現在幸福であると考え個人のほうが将来に対する希望も高い。前述のように、幸福と希望は同一の意識から生じているものではなく、また希望感のほうがやや低く見積もられる傾向が見てとれたものの、幸福と希望には一定の強い関連性があることは明らかだと思われる。(表3)

表3 現在の幸福感×将来の希望感 N=1,200

		現在の幸福感							合計	
		低	←					→	高	
		1	2	3	4	5	6	7		
実数	得低 ↓ 1	19	21	11	13	2	3	0	69	
	来 ↑ 2	4	47	49	35	20	4	1	160	
	の 3	0	14	91	74	53	6	0	238	
	4	0	1	16	144	132	36	6	335	
	希 5	0	0	11	33	131	70	14	259	
	望 ↓ 6	0	0	4	3	19	47	11	84	
	感高 ↑ 7	1	0	1	4	7	9	33	55	
合計		24	83	183	306	364	175	65	1,200	
構成比	得低 ↓ 1	79.2%	25.3%	6.0%	4.2%	0.5%	1.7%	0.0%	5.8%	
	来 ↑ 2	16.7%	56.6%	26.8%	11.4%	5.5%	2.3%	1.5%	13.3%	
	の 3	0.0%	16.9%	49.7%	24.2%	14.6%	3.4%	0.0%	19.8%	
	4	0.0%	1.2%	8.7%	47.1%	36.3%	20.6%	9.2%	27.9%	
	希 5	0.0%	0.0%	6.0%	10.8%	36.0%	40.0%	21.5%	21.6%	
	望 ↓ 6	0.0%	0.0%	2.2%	1.0%	5.2%	26.9%	16.9%	7.0%	
	感高 ↑ 7	4.2%	0.0%	0.5%	1.3%	1.9%	5.1%	50.8%	4.6%	
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

(2) 属性別希望感

男女別にみると、希望感は女性のほうがやや高くなっているが、他の属性別による違いと比べてその差は小さい。希望感は性差によって直接的に生じるものというよりは、そのおかれた環境により強く影響されると思われる。(表4)

表4 性別×将来の希望感 N=1,200

		将来への希望感							合計	
		低	←					→	高	
		1	2	3	4	5	6	7		
実数	男性	51	105	170	204	156	43	37	766	
	女性	18	55	68	131	103	41	18	434	
合計		69	160	238	335	259	84	55	1,200	
構成比	男性	6.7%	13.7%	22.2%	26.6%	20.4%	5.6%	4.8%	100.0%	
	女性	4.1%	12.7%	15.7%	30.2%	23.7%	9.4%	4.1%	100.0%	
合計		5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%	

年代別にみると、希望感は働き盛りの40代が最も低く、一方でリタイア世代を含む60代以上で最も高くなっている。希望感を構成する具体的な対象は世代間で異なると思われるため単純な比較は難しいものの、中堅世代においては多種多様な要素が最も多く関係することが影響している可能性が考えられる。また、20代において最低ランクの希望感と回答したものの割合がやや高くなっていることにも留意が必要である。(表5)

表5 年代別×将来の希望感 N=1,200

		将来への希望感							合計	
		低	←					→	高	
		1	2	3	4	5	6	7		
実数	20代	12	17	23	35	33	9	7	136	
	30代	23	48	73	92	82	28	21	367	
	40代	21	58	82	113	82	22	16	394	
	50代	10	30	49	57	46	14	7	213	
	60代～	3	7	11	38	16	11	4	90	
	合計	69	160	238	335	259	84	55	1,200	
構成比	20代	8.8%	12.5%	16.9%	25.7%	24.3%	6.6%	5.1%	100.0%	
	30代	6.3%	13.1%	19.9%	25.1%	22.3%	7.6%	5.7%	100.0%	
	40代	5.3%	14.7%	20.8%	28.7%	20.8%	5.6%	4.1%	100.0%	
	50代	4.7%	14.1%	23.0%	26.8%	21.6%	6.6%	3.3%	100.0%	
	60代～	3.3%	7.8%	12.2%	42.2%	17.8%	12.2%	4.4%	100.0%	
	合計	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%	

首都圏と福井県では、希望感に大きな違いはないものの、その傾向は若干ではあるが異なっている。平均値でみると、両地域

はほぼ同じ希望感を示しており、意識の差はほとんどないものと思われる。しかしながら、首都圏住民のほうが高い希望感及び低い希望感をもつものの割合が若干ではあるもののそれぞれ高くなっている。経済的な状況をはじめとする格差が、福井県よりも大都市部において顕著であることが影響している可能性も考えられる。(表6)

表6 地域別×将来の希望感 N=1,600

		将来への希望感							合計
		低	←	1	2	3	4	5	
実数	首都圏	25	58	71	110	84	34	18	400
	福井県	69	160	238	335	259	84	55	1,200
	合計	94	218	309	445	343	118	73	1,600
構成比	首都圏	6.3%	14.5%	17.8%	27.5%	21.0%	8.5%	4.5%	100.0%
	福井県	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%
	合計	5.9%	13.6%	19.3%	27.8%	21.4%	7.4%	4.6%	100.0%

注) 首都圏: 東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県

健康状態と希望感の関連性は明白にあらわれている。健康状態が良好なほど、高い希望感を持つものの割合が高くなっている。また、「とても健康」と「まあ健康」と回答したもとのでは、希望感の高いものの割合において特に大きな差が生じている。自分自身の健康状態が、その個人の希望感の基礎的かつ重要な要件になっているものと思われる。(表7)

表7 健康状態×将来の希望感 N=1,200

		将来への希望感							合計
		低	←	1	2	3	4	5	
実数	とても健康	3	15	22	43	50	26	21	180
	まあ健康	23	93	166	234	189	52	25	782
	あまり健康でない	32	42	47	54	18	6	8	207
構成比	とても健康	1.7%	8.3%	12.2%	23.9%	27.8%	14.4%	11.7%	100.0%
	まあ健康	2.9%	11.9%	21.2%	29.9%	24.2%	6.6%	3.2%	100.0%
	あまり健康でない	15.5%	20.3%	22.7%	26.1%	8.7%	2.9%	3.9%	100.0%
合計	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%	

世帯構成別の希望感は、「夫婦のみ」が最も高くなっており、次いで「夫婦と子供」、「三世同居」の順となっている。一方で「一人暮らし」の希望感突出して低くなっており、一人で暮らしていることのみが希

望感を低下させる直接的な要因ではないと思われるものの、単身世帯の増加が社会全体の希望感の低下を招くことも懸念される。(表8)

表8 世帯構成×将来の希望感 N=1,200

		将来への希望感							合計
		低	←	1	2	3	4	5	
実数	夫婦のみ	6	19	30	50	43	17	11	176
	夫婦と子供	25	66	91	136	118	41	24	501
	夫婦と親	3	7	17	23	12	4	2	68
	三世同居	10	31	54	76	55	15	10	251
	一人暮らし	17	28	35	31	19	4	3	137
	その他	8	9	11	19	12	3	5	67
合計	69	160	238	335	259	84	55	1,200	
構成比	夫婦のみ	3.4%	10.8%	17.0%	28.4%	24.4%	9.7%	6.3%	100.0%
	夫婦と子供	5.0%	13.2%	18.2%	27.1%	23.6%	8.2%	4.8%	100.0%
	夫婦と親	4.4%	10.3%	25.0%	33.8%	17.6%	5.9%	2.9%	100.0%
	三世同居	4.0%	12.4%	21.5%	30.3%	21.9%	6.0%	4.0%	100.0%
	一人暮らし	12.4%	20.4%	25.5%	22.6%	13.9%	2.9%	2.2%	100.0%
	その他	11.9%	13.4%	16.4%	28.4%	17.9%	4.5%	7.5%	100.0%
合計	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%	

注) 夫婦と子供は、「男親と子供、または、女親と子供」を含む

就業状態別にみると、「経営者」の希望感が最も高く、「学生」もやや高くなっている。「正社員」と「非正規社員」を比較するとその差はほとんどなく、福井県における非正規社員の社会的位置づけや個人の意識は、ワーキングプア問題に象徴されるような全国的な傾向とはやや異なっていることが伺える。一方で、「自営業」や「未就労者」の希望感低くなっている。(表9)

表9 就業状態×将来の希望感 N=1,200

		将来への希望感							合計
		低	←	1	2	3	4	5	
実数	経営者	1	4	8	7	8	5	5	38
	自営業	8	21	33	29	22	9	5	127
	正社員	29	72	139	176	145	36	27	624
	非正規社員	10	27	28	51	39	16	7	178
	学生	1	2	4	7	3	1	2	20
	就活中未就労	4	10	7	9	7	2	2	41
構成比	未就活未就労	15	21	16	48	28	12	3	143
	その他	1	3	3	8	7	3	4	29
	合計	69	160	238	335	259	84	55	1,200
	経営者	2.6%	10.5%	21.1%	18.4%	21.1%	13.2%	13.2%	100.0%
	自営業	6.3%	16.5%	26.0%	22.8%	17.3%	7.1%	3.9%	100.0%
	正社員	4.6%	11.5%	22.3%	28.2%	23.2%	5.8%	4.3%	100.0%
構成比	非正規社員	5.6%	15.2%	15.7%	28.7%	21.9%	9.0%	3.9%	100.0%
	学生	5.0%	10.0%	20.0%	35.0%	15.0%	5.0%	10.0%	100.0%
	就活中未就労	9.8%	24.4%	17.1%	22.0%	17.1%	4.9%	4.9%	100.0%
	未就活未就労	10.5%	14.7%	11.2%	33.6%	19.6%	8.4%	2.1%	100.0%
	その他	3.4%	10.3%	10.3%	27.6%	24.1%	10.3%	13.8%	100.0%
	合計	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%

世帯年収との関係でみると、年収が高くなるほど希望感も高くなっている。しかし

ながら、年収が低い層においても、希望感が高いものが一定程度存在しており、経済的な要因は希望感に関連しているものの、他の要素も含めた様々な観点から意識が形成されているものと思われる。(表10)

表10 世帯年収×将来の希望感 N=1,200

	将来への希望感							合計	
	低	←	1	2	3	4	5		6
実数	200万円未満	15	27	15	33	12	4	7	113
	200~400万円未満	29	35	68	60	46	9	10	257
	400~600万円未満	15	43	72	97	75	23	12	337
	600~800万円未満	6	33	36	65	47	17	9	213
	800~1,000万円未満	1	17	25	42	40	13	6	144
	1,000万円以上	3	5	22	38	39	18	11	136
合計	69	160	238	335	259	84	55	1,200	
構成比	200万円未満	13.3%	23.9%	13.3%	29.2%	10.6%	3.5%	6.2%	100.0%
	200~400万円未満	11.3%	13.6%	26.5%	23.3%	17.9%	3.5%	3.9%	100.0%
	400~600万円未満	4.5%	12.8%	21.4%	28.8%	22.3%	6.8%	3.6%	100.0%
	600~800万円未満	2.8%	15.5%	16.9%	30.5%	22.1%	8.0%	4.2%	100.0%
	800~1,000万円未満	0.7%	11.8%	17.4%	29.2%	27.8%	9.0%	4.2%	100.0%
	1,000万円以上	2.2%	3.7%	16.2%	27.9%	28.7%	13.2%	8.1%	100.0%
合計	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%	

社会活動への参加状況と希望感の関連をみると、社会活動へ積極的に参加するものほど、高い希望感をもつものの割合が高くなっている。特に「積極的に参加」するものにおける高い希望感と、「まったく参加せず」のものにおける低い希望感の割合がそれぞれ突出している。社会活動への参加状況が、直接的にせよ間接的にせよ何らかの形で希望感の高低に影響している。(表11)

表11 社会活動×将来の希望感 N=1,200

	将来への希望感							合計	
	低	←	1	2	3	4	5		6
実数	積極的に参加	1	4	8	16	18	6	10	63
	割合がつけば参加	10	28	68	110	87	23	19	345
	気が向けば参加	13	46	82	100	76	32	9	358
	まったく参加せず	45	82	80	109	78	23	17	434
	合計	69	160	238	335	259	84	55	1,200
構成比	積極的に参加	1.6%	6.3%	12.7%	25.4%	28.6%	9.5%	15.9%	100.0%
	割合がつけば参加	2.9%	8.1%	19.7%	31.9%	25.2%	6.7%	5.5%	100.0%
	気が向けば参加	3.6%	12.8%	22.9%	27.9%	21.2%	8.9%	2.5%	100.0%
	まったく参加せず	10.4%	18.9%	18.4%	25.1%	18.0%	5.3%	3.9%	100.0%
	合計	5.8%	13.3%	19.8%	27.9%	21.6%	7.0%	4.6%	100.0%

(3) 分野別希望感

次に、どういふ分野における個別の希望が全体の希望につながるかの関係性をみるため、24の分野別希望感と総合的な希望感の関連をクロス集計により分析する。

仕事領域に関する「就業環境」、「労働環境」、「社会的地位や役割」、「仕事のやりがい」の4項目は、いずれも総合的な希望感と関連性が強くなっており、仕事に関する事項が将来に希望を持てるかどうかという点において大変重要視されていることが伺える。特に「仕事のやりがい」及び「社会的地位や役割」が将来の希望感と強く結びついている。どのようなことにやりがいを見出すかであるとか、どのような地位や役割に立ちたいかとかの基準は各自異なるものと思われるが、仕事を行うに当たっての動機づけとも言えるこれらの事項が非常に重要であり、また、そのことが総合的な希望感に強く結びついて意識されている。

さらに、個別の希望感についての平均値を見ると、他の領域に比べてその値が小さくなっており、特に「就業環境」、「労働環境」の希望感が低くなっている。雇用や労働に関する将来への不安が示されているものと思われる。(表12~15)

表12 就業環境についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	就業環境についての希望感							合計	
	低	←	1	2	3	4	5		6
実数	得低 1	50	10	8	1	0	0	0	69
	来↑ 2	48	72	24	10	5	1	0	160
	の 3	16	79	83	46	11	2	1	238
	4	15	57	102	117	31	10	3	335
	希 5	3	29	64	96	52	13	2	259
	望↓ 6	2	7	10	32	24	6	3	84
	感高 7	3	1	3	14	9	6	19	55
合計	137	255	294	316	132	38	28	1,200	
構成比	得低 1	36.5%	3.9%	2.7%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑ 2	35.0%	28.2%	8.2%	3.2%	3.8%	2.6%	0.0%	13.3%
	の 3	11.7%	31.0%	28.2%	14.6%	8.3%	5.3%	3.6%	19.8%
	4	10.9%	22.4%	34.7%	37.0%	23.5%	26.3%	10.7%	27.9%
	希 5	2.2%	11.4%	21.8%	30.4%	39.4%	34.2%	7.1%	21.6%
	望↓ 6	1.5%	2.7%	3.4%	10.1%	18.2%	15.8%	10.7%	7.0%
	感高 7	2.2%	0.4%	1.0%	4.4%	6.8%	15.8%	67.9%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表13 労働環境についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		労働環境についての希望感							合計
		低	←					→	
		1	2	3	4	5	6	7	
実数	得低1	49	8	9	2	1	0	0	69
	来↑2	52	72	18	14	4	0	0	160
	の3	19	89	75	41	11	1	2	238
	4	21	59	100	114	29	6	6	335
	希5	5	24	67	100	48	13	2	259
	望↓6	1	11	11	28	24	7	2	84
	感高7	3	2	2	17	8	7	16	55
合計		150	265	282	316	125	34	28	1,200
構成比	得低1	32.7%	3.0%	3.2%	0.6%	0.8%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑2	34.7%	27.2%	6.4%	4.4%	3.2%	0.0%	0.0%	13.3%
	の3	12.7%	33.6%	26.6%	13.0%	8.8%	2.9%	7.1%	19.8%
	4	14.0%	22.3%	35.5%	36.1%	23.2%	17.6%	21.4%	27.9%
	希5	3.3%	9.1%	23.8%	31.6%	38.4%	38.2%	7.1%	21.6%
	望↓6	0.7%	4.2%	3.9%	8.9%	19.2%	20.6%	7.1%	7.0%
	感高7	2.0%	0.8%	0.7%	5.4%	6.4%	20.6%	57.1%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表14 社会的地位や役割についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		社会的地位や役割についての希望感							合計
		低	←					→	
		1	2	3	4	5	6	7	
実数	得低1	54	7	6	2	0	0	0	69
	来↑2	52	60	33	14	0	1	0	160
	の3	21	81	77	47	10	1	1	238
	4	19	54	100	131	22	5	4	335
	希5	8	21	49	112	54	13	2	259
	望↓6	1	7	4	30	21	20	1	84
	感高7	2	1	5	11	11	6	19	55
合計		157	231	274	347	118	46	27	1,200
構成比	得低1	34.4%	3.0%	2.2%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑2	33.1%	26.0%	12.0%	4.0%	0.0%	2.2%	0.0%	13.3%
	の3	13.4%	35.1%	28.1%	13.5%	8.5%	2.2%	3.7%	19.8%
	4	12.1%	23.4%	36.5%	37.8%	18.6%	10.9%	14.8%	27.9%
	希5	5.1%	9.1%	17.9%	32.3%	45.8%	28.3%	7.4%	21.6%
	望↓6	0.6%	3.0%	1.5%	8.6%	17.8%	43.5%	3.7%	7.0%
	感高7	1.3%	0.4%	1.8%	3.2%	9.3%	13.0%	70.4%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表15 仕事のやりがいについての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		仕事のやりがいについての希望感							合計
		低	←					→	
		1	2	3	4	5	6	7	
実数	得低1	48	9	10	2	0	0	0	69
	来↑2	32	69	35	21	3	0	0	160
	の3	15	63	92	44	19	2	3	238
	4	13	44	83	144	37	9	5	335
	希5	4	9	50	87	78	25	6	259
	望↓6	0	2	6	25	29	18	4	84
	感高7	2	0	4	11	6	7	25	55
合計		114	196	280	334	172	61	43	1,200
構成比	得低1	42.1%	4.6%	3.6%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑2	28.1%	35.2%	12.5%	6.3%	1.7%	0.0%	0.0%	13.3%
	の3	13.2%	32.1%	32.9%	13.2%	11.0%	3.3%	7.0%	19.8%
	4	11.4%	22.4%	29.6%	43.1%	21.5%	14.8%	11.6%	27.9%
	希5	3.5%	4.6%	17.9%	26.0%	45.3%	41.0%	14.0%	21.6%
	望↓6	0.0%	1.0%	2.1%	7.5%	16.9%	29.5%	9.3%	7.0%
	感高7	1.8%	0.0%	1.4%	3.3%	3.5%	11.5%	58.1%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

家族領域に関する「結婚」、「育児」、「家族間会話」、「三世代コミュニケーション」の4項目は、総合的な希望感と関連性が中程度の強さになっている。これらの項目は、総合的な希望感に対する重要度が個人の属性によって大きく異なるものと思われる。

さらには、「結婚」、「育児」については前項に記載した通りインパーソナルな質問形式にしたものの、パーソナルな質問として捉える回答者が生じ<sup>4</sup>、総合的な希望感との結びつきにおいてこの両者による差が出た可能性がある。ここでは属性別のさらなるクロス集計の詳細については省略するが、全体では中程度の関連性ではあるものの、女性や子育て世代等においてはこれよりも高い関連性になっている。

また、これらの家族領域についての各分野項目は、個人のライフステージで見ると一生涯のうちで比較的短期間に過ぎていくものから長期間に渡るものまで差があるため、自らの将来的な希望感と結びつけるのには、それぞれにおいてやや難しい面があったことは否定できない。

以上のことを考慮すると、家族領域に関する事項は、総合的な希望感に対して小さくはない影響を与えているものと思われる。(表16~19)

表16 結婚環境についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		結婚環境についての希望感							合計
		低	←					→	
		1	2	3	4	5	6	7	
実数	得低1	40	10	8	8	1	1	1	69
	来↑2	27	68	39	21	4	1	0	160
	の3	13	45	108	54	15	3	0	238
	4	10	36	92	152	33	9	3	335
	希5	8	21	56	95	56	15	8	259
	望↓6	1	5	15	31	17	13	2	84
	感高7	3	2	5	17	11	8	9	55
合計		102	187	323	378	137	50	23	1,200
構成比	得低1	39.2%	5.3%	2.5%	2.1%	0.7%	2.0%	4.3%	5.8%
	来↑2	26.5%	36.4%	12.1%	5.6%	2.9%	2.0%	0.0%	13.3%
	の3	12.7%	24.1%	33.4%	14.3%	10.9%	6.0%	0.0%	19.8%
	4	9.8%	19.3%	28.5%	40.2%	24.1%	18.0%	13.0%	27.9%
	希5	7.8%	11.2%	17.3%	25.1%	40.9%	30.0%	34.8%	21.6%
	望↓6	1.0%	2.7%	4.6%	8.2%	12.4%	26.0%	8.7%	7.0%
	感高7	2.9%	1.1%	1.5%	4.5%	8.0%	16.0%	39.1%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表17 育児環境についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

	育児環境についての希望感							合計	
	低	←					→		高
	1	2	3	4	5	6	7		
実数	得低1	36	8	15	7	2	0	1	69
	来↑2	33	60	48	17	2	0	0	160
	の3	13	64	108	42	10	1	0	238
	4	12	47	102	134	31	7	2	335
	希5	6	30	68	99	47	8	1	259
	望↓6	3	6	21	26	17	10	1	84
	感高7	3	2	10	17	12	1	10	55
合計	106	217	372	342	121	27	15	1,200	
構成比	得低1	34.0%	3.7%	4.0%	2.0%	1.7%	0.0%	6.7%	5.8%
	来↑2	31.1%	27.6%	12.9%	5.0%	1.7%	0.0%	0.0%	13.3%
	の3	12.3%	29.5%	29.0%	12.3%	8.3%	3.7%	0.0%	19.8%
	4	11.3%	21.7%	27.4%	39.2%	25.6%	25.9%	13.3%	27.9%
	希5	5.7%	13.8%	18.3%	28.9%	38.8%	29.6%	6.7%	21.6%
	望↓6	2.8%	2.8%	5.6%	7.6%	14.0%	37.0%	6.7%	7.0%
	感高7	2.8%	0.9%	2.7%	5.0%	9.9%	3.7%	66.7%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表18 家族間での会話についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

	家族間での会話についての希望感							合計	
	低	←					→		高
	1	2	3	4	5	6	7		
実数	得低1	27	8	15	13	4	1	1	69
	来↑2	13	46	45	33	14	7	2	160
	の3	5	37	89	69	27	10	1	238
	4	4	23	71	143	69	21	4	335
	希5	2	8	32	87	86	36	8	259
	望↓6	0	3	10	16	22	28	5	84
	感高7	2	3	4	12	10	5	19	55
合計	53	128	266	373	232	108	40	1,200	
構成比	得低1	50.9%	6.3%	5.6%	3.5%	1.7%	0.9%	2.5%	5.8%
	来↑2	24.5%	35.9%	16.9%	8.8%	6.0%	6.5%	5.0%	13.3%
	の3	9.4%	28.9%	33.5%	18.5%	11.6%	9.3%	2.5%	19.8%
	4	7.5%	18.0%	26.7%	38.3%	29.7%	19.4%	10.0%	27.9%
	希5	3.8%	6.3%	12.0%	23.3%	37.1%	33.3%	20.0%	21.6%
	望↓6	0.0%	2.3%	3.8%	4.3%	9.5%	25.9%	12.5%	7.0%
	感高7	3.8%	2.3%	1.5%	3.2%	4.3%	4.6%	47.5%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表19 三世代にわたるコミュニケーションについての希望感×将来の希望感  
N=1,200

	三世代にわたるコミュニケーションについての希望感							合計	
	低	←					→		高
	1	2	3	4	5	6	7		
実数	得低1	33	13	11	4	5	2	1	69
	来↑2	32	46	47	20	12	2	1	160
	の3	16	57	81	54	21	7	2	238
	4	11	43	83	125	49	18	6	335
	希5	13	23	46	71	76	27	3	259
	望↓6	1	3	14	15	24	22	5	84
	感高7	3	2	4	14	11	7	14	55
合計	109	187	286	303	198	85	32	1,200	
構成比	得低1	30.3%	7.0%	3.8%	1.3%	2.5%	2.4%	3.1%	5.8%
	来↑2	29.4%	24.6%	16.4%	6.6%	6.1%	2.4%	3.1%	13.3%
	の3	14.7%	30.5%	28.3%	17.8%	10.6%	8.2%	6.3%	19.8%
	4	10.1%	23.0%	29.0%	41.3%	24.7%	21.2%	18.8%	27.9%
	希5	11.9%	12.3%	16.1%	23.4%	38.4%	31.8%	9.4%	21.6%
	望↓6	0.9%	1.6%	4.9%	5.0%	12.1%	25.9%	15.6%	7.0%
	感高7	2.8%	1.1%	1.4%	4.6%	5.6%	8.2%	43.8%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

健康領域に関する4項目のうち、自分自身の直接的な健康面についての事項である「健康状態」、「健康的な生活」、「老後」の3項目については、総合的な希望感と強い結びつきが見られる。将来に渡って健康であり続けることが、希望を持つ基本的かつ必

須の条件になっていることが伺える。一方で個人の健康に間接的な影響を与えるものである「環境問題」については、総合的な希望感との結びつきは弱いという結果になった。地球規模での環境問題等については、各種の世論調査にて重要視する割合が増加傾向にあるものの、個人の希望感の高低に大きな影響を与えるまでには至っていない。また、「健康的な生活」については、希望感の平均値が高くなっており、総合的な希望感への影響とともに、現時点で最も高い希望感を持てる項目分野の一つであると言える。(表20~23)

表20 健康状態についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

	健康状態についての希望感							合計	
	低	←					→		高
	1	2	3	4	5	6	7		
実数	得低1	42	9	6	9	3	0	7	69
	来↑2	26	54	41	24	10	5	0	160
	の3	7	44	98	60	20	7	2	238
	4	9	38	84	145	46	12	1	335
	希5	5	8	52	92	82	19	1	259
	望↓6	0	2	9	24	26	18	5	84
	感高7	2	0	5	14	14	6	14	55
合計	91	155	295	368	201	67	23	1,200	
構成比	得低1	46.2%	5.8%	2.0%	2.4%	1.5%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑2	28.6%	34.8%	13.9%	6.5%	5.0%	7.5%	0.0%	13.3%
	の3	7.7%	28.4%	33.2%	16.3%	10.0%	10.4%	8.7%	19.8%
	4	9.9%	24.5%	28.5%	39.4%	22.9%	17.9%	4.3%	27.9%
	希5	5.5%	5.2%	17.6%	25.0%	40.8%	28.4%	4.3%	21.6%
	望↓6	0.0%	1.3%	3.1%	6.5%	12.9%	26.9%	21.7%	7.0%
	感高7	2.2%	0.0%	1.7%	3.8%	7.0%	9.0%	60.9%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表21 健康的な生活についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

	健康的な生活についての希望感							合計	
	低	←					→		高
	1	2	3	4	5	6	7		
実数	得低1	34	14	12	5	3	0	1	69
	来↑2	7	52	56	28	12	5	0	160
	の3	1	29	82	76	38	9	3	238
	4	1	17	48	152	89	22	6	335
	希5	1	5	17	66	102	56	12	259
	望↓6	1	0	5	8	30	27	13	84
	感高7	0	0	0	6	7	11	31	55
合計	45	117	220	341	281	130	66	1,200	
構成比	得低1	75.6%	12.0%	5.5%	1.5%	1.1%	0.0%	1.5%	5.8%
	来↑2	15.6%	44.4%	25.5%	8.2%	4.3%	3.8%	0.0%	13.3%
	の3	2.2%	24.8%	37.3%	22.3%	13.5%	6.9%	4.5%	19.8%
	4	2.2%	14.5%	21.8%	44.6%	31.7%	16.9%	9.1%	27.9%
	希5	2.2%	4.3%	7.7%	19.4%	36.3%	43.1%	18.2%	21.6%
	望↓6	2.2%	0.0%	2.3%	2.3%	10.7%	20.8%	19.7%	7.0%
	感高7	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	2.5%	8.5%	47.0%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	



表22 老後についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		老後についての希望感							合計	
		低	←	1	2	3	4	5		6
実数	得低	1	37	18	5	6	2	0	1	69
	来↑	2	35	62	38	18	4	3	0	160
	の	3	12	48	100	49	22	6	1	238
		4	9	31	81	147	59	7	1	335
	希	5	2	13	46	84	79	31	4	259
	望↓	6	0	0	9	22	30	20	3	84
	感高	7	1	2	3	17	6	10	16	55
合計		96	174	282	343	202	77	26	1,200	
構成比	得低	1	3.1%	1.5%	0.4%	0.5%	0.2%	0.0%	0.1%	5.8%
	来↑	2	3.6%	5.3%	3.2%	1.5%	0.3%	0.2%	0.0%	13.3%
	の	3	1.2%	4.1%	8.5%	4.1%	1.9%	0.3%	0.1%	19.8%
		4	0.9%	1.8%	2.9%	2.5%	1.2%	0.3%	0.1%	27.9%
	希	5	0.2%	1.1%	3.2%	2.5%	1.3%	0.2%	0.3%	21.6%
	望↓	6	0.0%	0.0%	0.3%	0.6%	0.8%	0.5%	0.2%	7.0%
	感高	7	1.0%	0.1%	0.1%	0.5%	0.3%	1.3%	1.3%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表23 環境問題についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		環境問題についての希望感							合計		
		低	←	1	2	3	4	5		6	7
実数	得低	1	37	12	3	5	8	4	2	1	69
	来↑	2	43	64	34	15	2	1	1	0	160
	の	3	29	74	76	33	17	7	2	0	238
		4	46	76	94	97	16	5	1	0	335
	希	5	27	60	63	58	38	11	2	0	259
	望↓	6	11	13	23	23	4	8	2	0	84
	感高	7	9	9	10	10	4	5	8	5	55
合計		202	308	305	244	85	39	17	1	1,200	
構成比	得低	1	18.3%	3.9%	1.6%	3.3%	4.7%	5.1%	5.9%	5.8%	
	来↑	2	21.3%	20.8%	11.1%	6.1%	2.4%	2.6%	5.9%	13.3%	
	の	3	14.4%	24.0%	24.9%	13.5%	20.0%	17.9%	11.8%	19.8%	
		4	22.8%	24.7%	30.8%	39.8%	18.8%	12.8%	5.9%	27.9%	
	希	5	13.4%	19.5%	20.7%	23.8%	44.7%	28.2%	11.8%	21.6%	
	望↓	6	5.4%	4.2%	7.5%	9.4%	4.7%	20.5%	11.8%	7.0%	
	感高	7	4.5%	2.9%	3.3%	4.1%	4.7%	12.8%	47.1%	4.6%	
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

教育領域の4項目についての総合的な希望感との関連性は、「地域の教育力」、「生涯学習」については中程度の関連性であり、「初等教育環境」、「高等教育環境」ではやや弱い結びつきという結果になった。この結果も、家族領域と同様に、個人の属性やライフステージによってその重要度に差が生じているものと思われる。(表24~27)

表24 初等教育環境についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		初等教育環境についての希望感							合計	
		低	←	1	2	3	4	5		6
実数	得低	1	27	13	18	9	2	0	0	69
	来↑	2	19	47	55	30	8	1	0	160
	の	3	8	45	95	63	25	2	0	238
		4	11	28	89	165	38	4	0	335
	希	5	5	23	62	104	54	11	0	259
	望↓	6	1	5	9	44	17	7	1	84
	感高	7	2	6	5	18	8	4	12	55
合計		73	167	333	433	152	29	13	1,200	
構成比	得低	1	37.0%	7.8%	5.4%	2.1%	1.3%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑	2	26.0%	28.1%	16.5%	6.9%	5.3%	3.4%	0.0%	13.3%
	の	3	11.0%	26.9%	28.5%	14.5%	16.4%	6.9%	0.0%	19.8%
		4	15.1%	16.8%	26.7%	38.1%	25.0%	13.8%	0.0%	27.9%
	希	5	6.8%	13.8%	18.6%	24.0%	35.5%	37.9%	0.0%	21.6%
	望↓	6	1.4%	3.0%	2.7%	10.2%	11.2%	24.1%	7.7%	7.0%
	感高	7	2.7%	3.6%	1.5%	4.2%	5.3%	13.8%	92.3%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表25 地域の教育力についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		地域の教育力についての希望感							合計	
		低	←	1	2	3	4	5		6
実数	得低	1	35	13	13	4	2	0	0	69
	来↑	2	27	61	47	17	8	0	0	160
	の	3	7	54	103	58	15	1	0	238
		4	15	41	105	135	34	4	1	335
	希	5	6	31	68	92	54	7	1	259
	望↓	6	3	8	13	36	18	5	1	84
	感高	7	4	5	6	12	13	2	13	55
合計		97	213	355	356	144	19	16	1,200	
構成比	得低	1	36.1%	6.1%	3.7%	1.7%	1.4%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑	2	27.8%	28.6%	13.2%	4.8%	5.6%	0.0%	0.0%	13.3%
	の	3	7.2%	25.4%	29.0%	16.3%	10.4%	5.3%	0.0%	19.8%
		4	15.5%	19.2%	29.6%	37.9%	23.6%	21.1%	6.3%	27.9%
	希	5	6.2%	14.6%	19.2%	25.8%	37.5%	36.8%	6.3%	21.6%
	望↓	6	3.1%	3.8%	3.7%	10.1%	12.5%	26.3%	6.3%	7.0%
	感高	7	4.1%	2.3%	1.7%	3.4%	9.0%	10.5%	81.3%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表26 高等教育環境についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		高等教育環境についての希望感							合計	
		低	←	1	2	3	4	5		6
実数	得低	1	31	14	13	4	3	1	0	69
	来↑	2	21	57	46	28	7	1	0	160
	の	3	9	58	92	55	22	2	0	238
		4	10	43	104	138	30	10	0	335
	希	5	6	27	68	98	54	5	1	259
	望↓	6	2	5	13	38	22	4	0	84
	感高	7	2	4	14	12	13	1	9	55
合計		81	208	350	376	151	24	10	1,200	
構成比	得低	1	38.3%	6.7%	3.7%	1.9%	2.0%	4.2%	0.0%	5.8%
	来↑	2	25.9%	27.4%	13.1%	7.4%	4.6%	4.2%	0.0%	13.3%
	の	3	11.1%	27.9%	26.3%	14.6%	14.6%	8.3%	0.0%	19.8%
		4	12.3%	20.7%	29.7%	36.7%	19.9%	41.7%	0.0%	27.9%
	希	5	7.4%	13.0%	19.4%	26.1%	35.8%	20.8%	10.0%	21.6%
	望↓	6	2.5%	2.4%	3.7%	10.1%	14.6%	16.7%	0.0%	7.0%
	感高	7	2.5%	1.9%	4.0%	3.2%	8.6%	4.2%	90.0%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表27 生涯学習環境についての希望感×将来の希望感  
N=1,200

		生涯学習環境についての希望感							合計	
		低	←	1	2	3	4	5		6
実数	得低	1	27	17	12	8	3	1	1	69
	来↑	2	11	52	49	36	10	1	1	160
	の	3	5	39	91	72	29	2	0	238
		4	9	27	93	140	50	13	3	335
	希	5	4	13	39	113	67	21	2	259
	望↓	6	0	3	4	27	29	15	6	84
	感高	7	0	2	8	11	13	5	16	55
合計		56	153	296	407	201	58	29	1,200	
構成比	得低	1	48.2%	11.1%	4.1%	2.0%	1.5%	1.7%	3.4%	5.8%
	来↑	2	19.6%	34.0%	16.6%	8.8%	5.0%	1.7%	3.4%	13.3%
	の	3	8.9%	25.5%	30.7%	17.7%	14.4%	3.4%	0.0%	19.8%
		4	16.1%	17.6%	31.4%	34.4%	24.9%	22.4%	10.3%	27.9%
	希	5	7.1%	8.5%	13.2%	27.8%	33.3%	36.2%	6.9%	21.6%
	望↓	6	0.0%	2.0%	1.4%	6.6%	14.4%	25.9%	20.7%	7.0%
	感高	7	0.0%	1.3%	2.7%	2.7%	6.5%	8.6%	55.2%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

地域・交流領域における5項目と総合的な希望感との関連性は、「社会との接点」では非常に強く、「社会活動」では中程度の結びつき、「地域への愛着」、「治安」、「災害への備え」の3項目では弱い関連性になった。属性別の希望感にて、社会活動への参加状況との強い結びつきが見られたが、社会との接点が希望と強く結びついていることと相まって、地域社会における位置づけや役割というものが非常に重要視されていることが伺える。

一方で、治安や防災については日常生活であまり意識することも少なく、将来の具体的な希望感というものと結びつけにくいことがその理由と思われる。しかしながらこのアンケート調査は2011年3月4～7日に実施したため、特に防災については、東日本大震災以降においてその意識が高まっている可能性もある。(表28～32)

表28 社会活動環境についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	社会活動環境についての希望感							合計		
	低	1	2	3	4	5	6		7	高
実数	得低	1	35	14	9	9	2	0	0	69
	来↑	2	23	51	48	31	7	0	0	160
	の	3	11	41	97	60	28	1	0	238
		4	11	39	91	141	35	15	3	335
	希	5	8	13	42	107	70	18	1	259
	望↓	6	1	6	8	30	29	9	1	84
	感高	7	3	3	9	15	6	7	12	55
合計		92	167	304	393	177	50	17	1,200	
構成比	得低	1	38.0%	8.4%	3.0%	2.3%	1.1%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑	2	25.0%	30.5%	15.8%	7.9%	4.0%	0.0%	0.0%	13.3%
	の	3	12.0%	24.6%	31.9%	15.3%	15.8%	2.0%	0.0%	19.8%
		4	12.0%	23.4%	29.9%	35.9%	19.8%	30.0%	17.6%	27.9%
	希	5	8.7%	7.8%	13.8%	27.2%	39.5%	36.0%	5.9%	21.6%
	望↓	6	1.1%	3.6%	2.6%	7.6%	16.4%	18.0%	5.9%	7.0%
	感高	7	3.3%	1.8%	3.0%	3.8%	3.4%	14.0%	70.6%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表29 地域への愛着についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	地域への愛着についての希望感							合計		
	低	1	2	3	4	5	6		7	高
実数	得低	1	34	5	9	15	2	2	2	69
	来↑	2	25	38	37	25	25	8	2	160
	の	3	8	34	72	57	43	17	7	238
		4	7	31	79	119	59	25	15	335
	希	5	8	12	38	79	73	44	5	259
	望↓	6	4	9	6	21	24	17	3	84
	感高	7	5	4	2	11	14	5	14	55
合計		91	133	243	327	240	118	48	1,200	
構成比	得低	1	37.4%	3.8%	3.7%	4.6%	0.8%	1.7%	4.2%	5.8%
	来↑	2	27.5%	28.6%	15.2%	7.6%	10.4%	6.8%	4.2%	13.3%
	の	3	8.8%	25.6%	29.6%	17.4%	17.9%	14.4%	14.6%	19.8%
		4	7.7%	23.3%	32.5%	36.4%	24.6%	21.2%	31.3%	27.9%
	希	5	8.8%	9.0%	15.6%	24.2%	30.4%	37.3%	10.4%	21.6%
	望↓	6	4.4%	6.8%	2.5%	6.4%	10.0%	14.4%	6.3%	7.0%
	感高	7	5.5%	3.0%	0.8%	3.4%	5.8%	4.2%	29.2%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表30 治安や防犯についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	治安や防犯についての希望感							合計		
	低	1	2	3	4	5	6		7	高
実数	得低	1	35	9	10	9	3	3	0	69
	来↑	2	27	53	44	20	12	4	0	160
	の	3	19	58	72	51	25	13	0	238
		4	18	48	107	116	32	8	6	335
	希	5	15	37	61	71	59	11	5	259
	望↓	6	6	5	13	33	20	5	2	84
	感高	7	3	3	9	16	12	6	6	55
合計		123	213	316	316	163	50	19	1,200	
構成比	得低	1	28.5%	4.2%	3.2%	2.8%	1.8%	6.0%	0.0%	5.8%
	来↑	2	22.0%	24.9%	13.9%	6.3%	7.4%	8.0%	0.0%	13.3%
	の	3	15.4%	27.2%	22.8%	16.1%	15.3%	26.0%	0.0%	19.8%
		4	14.6%	22.5%	33.9%	36.7%	19.6%	16.0%	31.6%	27.9%
	希	5	12.2%	17.4%	19.3%	22.5%	36.2%	22.0%	26.3%	21.6%
	望↓	6	4.9%	2.3%	4.1%	10.4%	12.3%	10.0%	10.5%	7.0%
	感高	7	2.4%	1.4%	2.8%	5.1%	7.4%	12.0%	31.6%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表31 災害への備えについての希望感×将来の希望感 N=1,200

	災害への備えについての希望感							合計		
	低	1	2	3	4	5	6		7	高
実数	得低	1	33	16	12	6	1	1	0	69
	来↑	2	25	61	48	22	3	1	0	160
	の	3	19	61	81	54	17	5	1	238
		4	20	61	102	125	23	4	0	335
	希	5	17	47	64	81	37	11	2	259
	望↓	6	3	12	16	31	13	7	2	84
	感高	7	4	3	13	13	10	6	6	55
合計		121	261	336	332	104	35	11	1,200	
構成比	得低	1	27.3%	6.1%	3.6%	1.8%	1.0%	2.9%	0.0%	5.8%
	来↑	2	20.7%	23.4%	14.3%	6.6%	2.9%	2.9%	0.0%	13.3%
	の	3	15.7%	23.4%	24.1%	16.3%	16.3%	14.3%	9.1%	19.8%
		4	16.5%	23.4%	30.4%	37.7%	22.1%	11.4%	0.0%	27.9%
	希	5	14.0%	18.0%	19.0%	24.4%	35.6%	31.4%	18.2%	21.6%
	望↓	6	2.5%	4.6%	4.8%	9.3%	12.5%	20.0%	18.2%	7.0%
	感高	7	3.3%	1.1%	3.9%	3.9%	9.6%	17.1%	54.5%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表32 社会との接点についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	災害への備えについての希望感							合計		
	低	1	2	3	4	5	6		7	高
実数	得低	1	37	13	10	7	2	0	0	69
	来↑	2	27	66	48	14	2	3	0	160
	の	3	13	52	91	57	21	4	0	238
		4	11	42	95	136	41	10	0	335
	希	5	5	20	48	104	65	16	1	259
	望↓	6	1	4	10	31	25	12	1	84
	感高	7	5	0	10	9	8	10	13	55
合計		99	197	312	358	164	55	15	1,200	
構成比	得低	1	37.4%	6.6%	3.2%	2.0%	1.2%	0.0%	0.0%	5.8%
	来↑	2	27.3%	33.5%	15.4%	3.9%	1.2%	5.5%	0.0%	13.3%
	の	3	13.1%	26.4%	29.2%	15.9%	12.8%	7.3%	0.0%	19.8%
		4	11.1%	21.3%	30.4%	38.0%	25.0%	18.2%	0.0%	27.9%
	希	5	5.1%	10.2%	15.4%	29.1%	39.6%	29.1%	6.7%	21.6%
	望↓	6	1.0%	2.0%	3.2%	8.7%	15.2%	21.8%	6.7%	7.0%
	感高	7	5.1%	0.0%	3.2%	2.5%	4.9%	18.2%	86.7%	4.6%
合計		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

消費領域の3項目と総合的な希望感との関連性は、「観光・レジャー」については中程度の強さ、「日常的買物」、「非日常的買物」については低くなっている。買い物については、日常的なもの、非日常的なものその傾向に差があまりなかったが、希望感の平均値を見ると、非日常的な買物についてのほうが低い希望感になっている。(表33～35)

表33 日常的な買い物についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	← 日常的な買い物についての希望感 →							合計	
	低 1	2	3	4	5	6	高 7		
実数	得低 1	22	8	11	15	8	3	2	69
	来↑ 2	9	36	34	38	26	12	5	160
	の 3	4	30	51	69	54	27	3	238
	4	6	19	55	152	71	28	4	335
	希 5	3	13	27	71	95	36	14	259
	望↓ 6	0	3	5	24	26	19	7	84
	感高 7	3	1	4	7	14	7	19	55
合計	47	110	187	376	294	132	54	1,200	
構成比	得低 1	46.8%	7.3%	5.9%	4.0%	2.7%	2.3%	3.7%	5.8%
	来↑ 2	19.1%	32.7%	18.2%	10.1%	8.8%	9.1%	9.3%	13.3%
	の 3	8.5%	27.3%	27.3%	18.4%	18.4%	20.5%	5.6%	19.8%
	4	12.8%	17.3%	29.4%	40.4%	24.1%	21.2%	7.4%	27.9%
	希 5	6.4%	11.8%	14.4%	18.9%	32.3%	27.3%	25.9%	21.6%
	望↓ 6	0.0%	2.7%	2.7%	6.4%	8.8%	14.4%	13.0%	7.0%
	感高 7	6.4%	0.9%	2.1%	1.9%	4.8%	5.3%	35.2%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表34 非日常的な買い物についての希望感×将来の希望感 N=1,200

	← 非日常的な買い物についての希望感 →							合計	
	低 1	2	3	4	5	6	高 7		
実数	得低 1	26	6	16	11	5	4	1	69
	来↑ 2	10	40	36	43	18	6	7	160
	の 3	11	35	63	71	37	19	2	238
	4	13	26	74	153	49	17	3	335
	希 5	4	17	35	91	69	34	9	259
	望↓ 6	1	6	8	27	21	16	5	84
	感高 7	3	2	4	17	9	5	15	55
合計	68	132	236	413	208	101	42	1,200	
構成比	得低 1	38.2%	4.5%	6.8%	2.7%	2.4%	4.0%	2.4%	5.8%
	来↑ 2	14.7%	30.3%	15.3%	10.4%	8.7%	5.9%	16.7%	13.3%
	の 3	16.2%	26.5%	26.7%	17.2%	17.8%	18.8%	4.8%	19.8%
	4	19.1%	19.7%	31.4%	37.0%	23.6%	16.8%	7.1%	27.9%
	希 5	5.9%	12.9%	14.8%	22.0%	33.2%	33.7%	21.4%	21.6%
	望↓ 6	1.5%	4.5%	3.4%	6.5%	10.1%	15.8%	11.9%	7.0%
	感高 7	4.4%	1.5%	1.7%	4.1%	4.3%	5.0%	35.7%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表35 観光・レジャーについての希望感×将来の希望感 N=1,200

	← 観光・レジャーについての希望感 →							合計	
	低 1	2	3	4	5	6	高 7		
実数	得低 1	22	9	14	16	3	5	0	69
	来↑ 2	5	38	47	41	18	11	0	160
	の 3	3	35	69	71	41	16	3	238
	4	2	16	64	167	65	19	2	335
	希 5	2	4	26	77	109	27	14	259
	望↓ 6	0	2	6	23	30	17	6	84
	感高 7	4	0	3	10	11	6	21	55
合計	38	104	229	405	277	101	46	1,200	
構成比	得低 1	57.9%	8.7%	6.1%	4.0%	1.1%	5.0%	0.0%	5.8%
	来↑ 2	13.2%	36.5%	20.5%	10.1%	6.5%	10.9%	0.0%	13.3%
	の 3	7.9%	33.7%	30.1%	17.5%	14.8%	15.8%	6.5%	19.8%
	4	5.3%	15.4%	27.9%	41.2%	23.5%	18.8%	4.3%	27.9%
	希 5	5.3%	3.8%	11.4%	19.0%	39.4%	26.7%	30.4%	21.6%
	望↓ 6	0.0%	1.9%	2.6%	5.7%	10.8%	16.8%	13.0%	7.0%
	感高 7	10.5%	0.0%	1.3%	2.5%	4.0%	5.9%	45.7%	4.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

## II. 共分散構造分析による希望感の意識構造

### 1. 共分散構造分析の概要

共分散構造分析とは、社会現象や自然現象の因果関係を統計的に考察する手法として用いられるものである。本研究の目的は、個人の希望感に焦点を当て、どういう項目において希望が得られれば総合的に人は希望があると感じるができるのかを明らかにすることである。すなわち、人が将来に対して希望を持てるのは、仕事での希望が得られたときに強く感じ取れるものなのか、それとも家庭での希望のほうがより強く関連しているのか、また、それらは地域や年齢等の属性によって差異があるのかなどの意識構造を統計的に分析しようとするものである。

こういった因果関係を統計的に処理する手法としては重相関分析等、様々な統計解析手法がある。これらの手法に対して共分散構造分析を用いることの利点は、複数の直接的に観測された変数（観測変数）に加え、これらをカテゴリー化した変数（潜在変数）を設定することにより、簡潔で理解しやすい意識構造モデルを構築することが可能となることである。さらには、こうしたカテゴリーを自由に仮説立てできることが特徴となっており、多くの複雑な観測変数相互の関係を、社会通念等によって、より人間の感性に近いモデルにて構築することが可能となる。次項で提示する希望感についての意識構造の仮説モデルについては、上述の共分散構造分析の利点を考慮して設定した。

本研究で対象とする希望感の意識構造は、まさに複数の要因が複雑に絡みつつ、総合的かつ有機的な希望感へと結びついているものと思われ、共分散構造分析を用いて考察することは適切であると思われる。元データとなるアンケート調査については、前章で述べたように共分散構造分析にて活用することを前提に、分析対象ごとの標本数を十分に確保するとともに、7件法での質問項目を設定している。なお、共分散構造分析を行うに当たって、1つでも欠損値が生じた場合、置き換えるかその標本自体を除外せざるを得ないが、ウェブアンケートで得られた標本には欠損値が生じないため、この問題点を回避できる。

## 2. 共分散構造分析の枠組みと構造モデル

分析で用いる変数には観測変数と潜在変数があるが、これらの変数の枠組みについては次のとおりである。

まず、総合的な希望感を構成するものとして、個人が生活していくうえで直面する仕事、家族、健康、教育、地域・交流、消費の6分野を設定した。次に、これらの各分野を3～5程度の項目に分類し、合計24項目の個別の希望感項目を設定した。その上で、観測変数としては総合的な希望感を問う質問項目と、24の個別の希望感を問う質問項目を、それぞれアンケート調査にて7件法で設定することにより直接的に把握した。6つのカテゴリー化された分野については、24の個別的な希望感と、総合的な希望感をつなぐものとしてとらえ、共分散構造分析における潜在変数として扱った。潜在変数は

アンケート調査で意識を把握していないカテゴリー項目であり、希望感の意識を構造的に理解するための概念である。

観測変数と潜在変数を全て用いて、希望感の意識構造を図式化したものが図2である。長方形で囲まれている変数が観測変数、楕円で囲まれている変数が潜在変数であり、円で示された $e$ 及び $d$ は誤差項である。また、変数間の因果関係を矢印の向きで示しており、次項の図では矢印上に係数を表示しているがこれは相対的な影響度合いを示すもので、全ての変数の分散を1とした標準化解である。

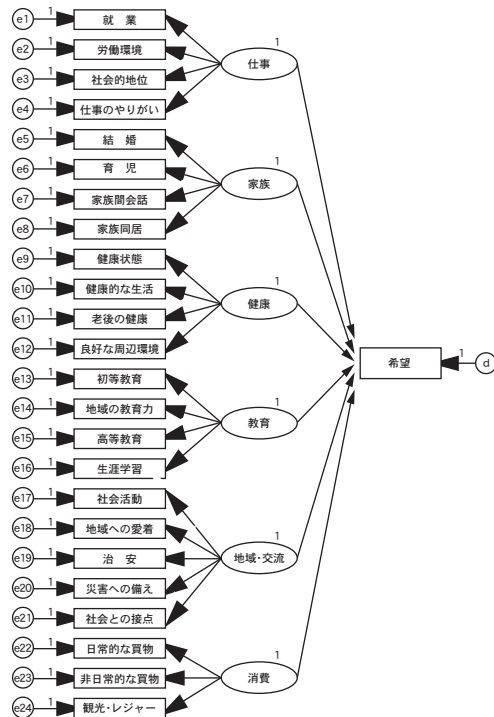
この仮説モデルから分析を始めるが、統計的に非収束や不適解が生じた場合や適合性指標において不十分な結果となった場合には、モデルの修正を行うなど、繰り返し検証を進めたうえで最終形を得た。モデルの修正にあたっては、属性別比較のため基本形は変えずに総合的な希望感への影響が小さい潜在変数や、他の変数と異なる因子を有すると推測される観測変数を削除することによって行うこととした。例を上げると、どの属性においても教育分野の希望感と総合的の希望感とは関連性が弱いという結果になったため、教育の潜在変数及びそれに分類される観測変数を全て構造モデルから削除している。結果として、属性別の意識構造モデルの最終形は、基本的構造は同一ながらもその関連性の強弱において異なるものとなった。

共分散構造分析の実施に当たっては、一般的に用いられている分析ソフトのAMOSを使用した。

次項では共分散構造分析の結果を回答者

の属性別に考察していく。また、共分散構造分析におけるモデルの適合性評価には各種の指標が存在しているが、ここでは代表的なものとしてGFI（適合度指標）等を提示した。

図2 希望感の意識構造モデルの仮説



### 3. 分析結果

#### (1) 地域別分析

福井県民の希望感は、健康及び仕事の分野から得られる傾向が強く、家族や消費の分野からも一定程度の影響がみられる。最も影響が強い健康分野においては、老後の健康に対する希望感が大きく結びついており、次いで健康状態の希望感となっている。また仕事分野では、それぞれの個別項目が同程度に結びついている。一方で教育及び地域・交流分野との関連性は弱く、構造モデルから削除している。なお、教育分野は全ての属性において総合的希望感との結びつきが弱いという結果になった。

希望感の意識構造において、福井県民と首都圏住民とは、いくつかの点で違いが生じている。首都圏においては、教育、地域・交流分野に加え、消費分野でも総合的希望感との関連性は薄くなっており構造モデルから削除している。また、総合的希望感との関連性の強さの順は、福井県が、「健康→仕事→家族」の順となっているのに対し、首都圏では「仕事→家族→健康」の順となっており、将来的な希望を持てるかどうかの重要な基準として、福井県民は健康を重要視していることがわかる。(図3, 4)

図3 福井県の希望感に関する意識構造モデル

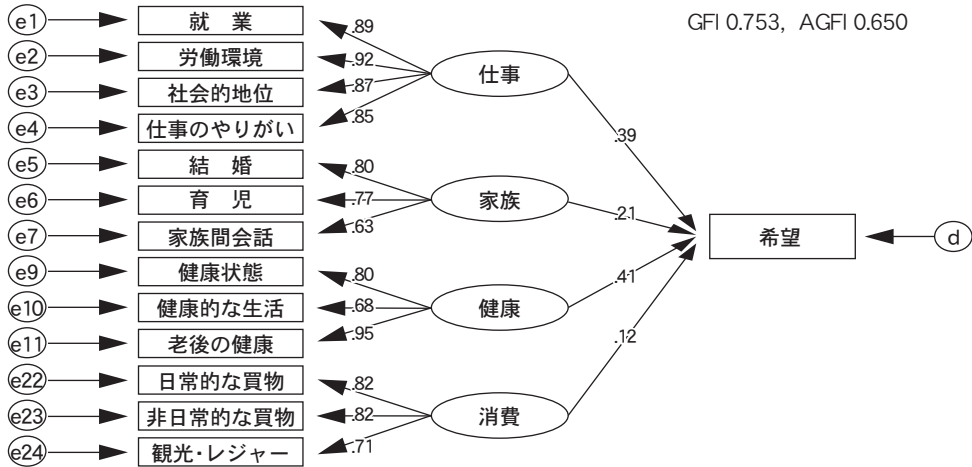
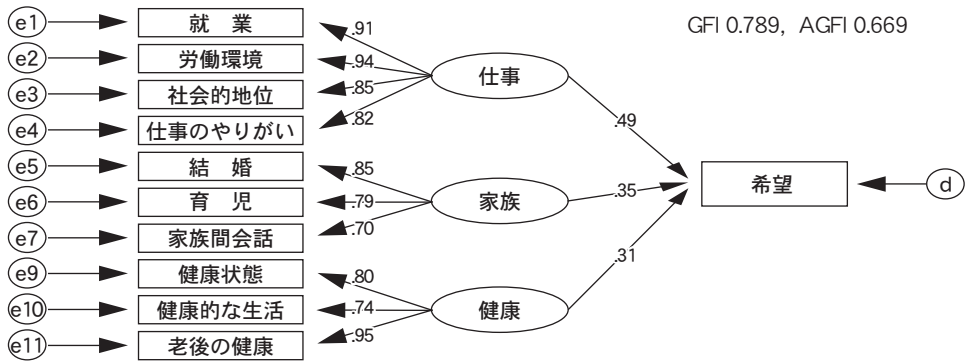


図4 首都圏の希望感に関する意識構造モデル



(2) 男女別分析

以降は全て福井県民における属性別の特徴点を分析したものである。

男性は仕事上の希望感が総合的な希望感に強く結びついており、次いで、健康、家族の順である。教育、地域・交流、消費分野については関連性が弱く削除している。これらは首都圏の傾向に類似しているものの、首都圏と比べて健康の関連性が強く家族の関連性が弱いという違いがある。

一方で女性は、健康分野が最も強く総合的な希望感と関連しているものの、他の分野別希望感もそれぞれある程度の結びつきがみられる。男性では弱かった地域・交流分野及び消費分野による総合的な希望感への影響も一定程度存在している。

男女を比較すると、仕事中心の希望感である男性と、健康が中心ではあるが他にも幅広い影響分野のある女性という対比がみてとれる。(図5, 6)

図5 福井県(男)の希望感に関する意識構造モデル

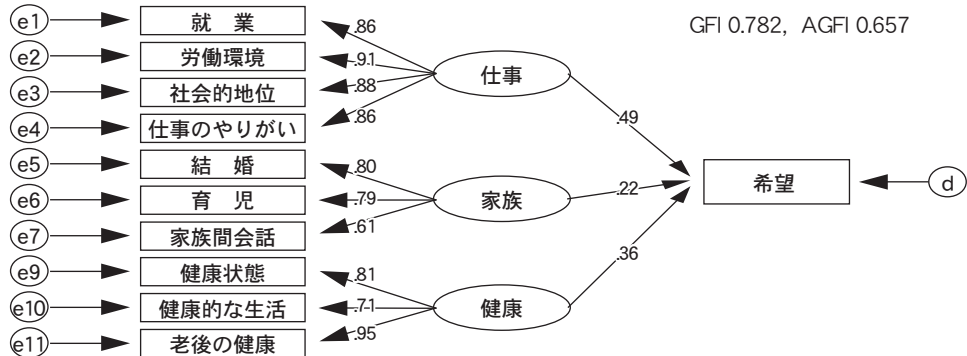
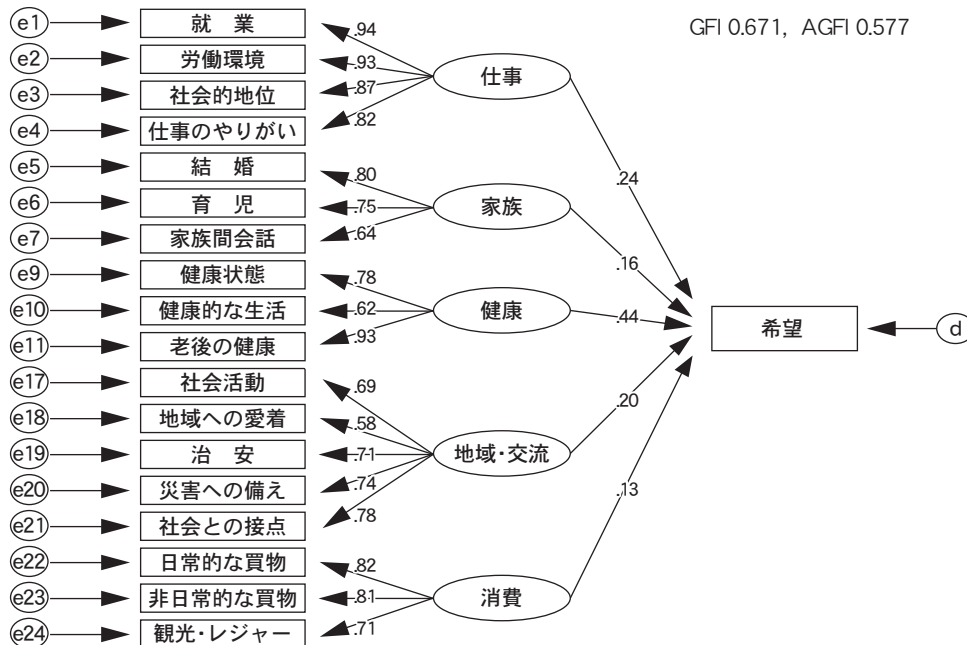


図6 福井県(女)の希望感に関する意識構造モデル



(3) 年齢階層別分析と一人暮らし世帯の分析

20歳代から50歳代までの各階層と60歳代以上の層に分けて特徴点を分析する。

20歳代では健康分野が最も強く総合的希望感と結びついており、他の分野の影響度と大きな差が生じている。個別項目をみると、若年層においても老後の健康について

強く意識していることがうかがえる。次いで、消費、仕事、家族の順となっており、20歳代において消費分野の重要性を示す結果となっている。一方で仕事分野が3番目に甘んじているのは他の年齢階層では見られない特徴点となっている。(図7)

30歳代では20歳代と同様に健康分野の影響が最も強いものの、仕事や家族分野の関連性もやや高くなっており、その突出度は相対的に低くなっている。また、消費については20歳代ほど高い影響度ではないもの

の一定の関連性が見られ、若年層において消費分野は総合的な希望感にとって重要なものとなっている。一方で、20歳代と同様に、教育、地域・交流分野の関連性は低くなっている。(図8)

図7 福井県(20代)の希望感に関する意識構造モデル

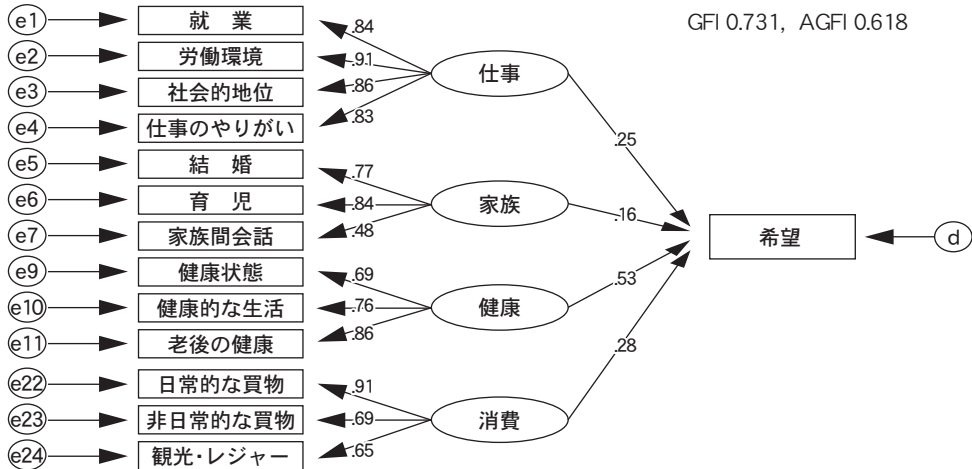
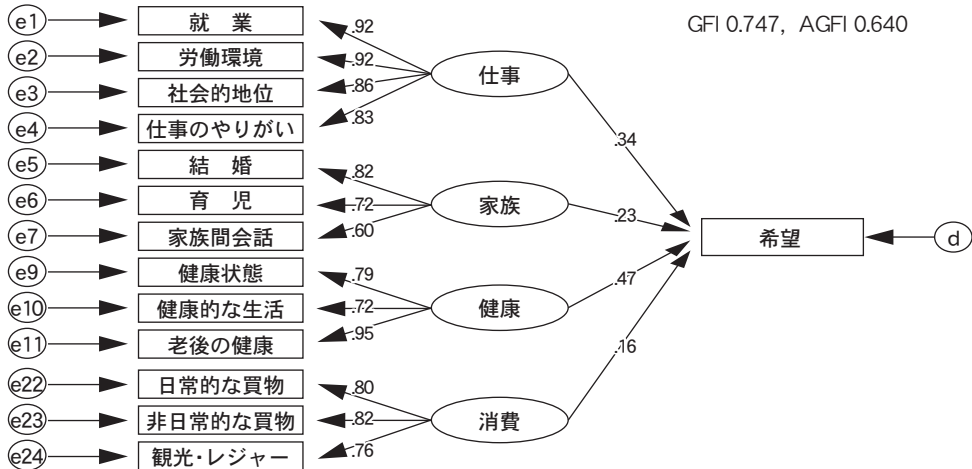


図8 福井県(30代)の希望感に関する意識構造モデル





40歳代になると、総合的希望感における仕事の重要性が健康を上回るようになり、この傾向は現役世代である50歳代まで続く。仕事上の役割も大きく働き盛りであるこの世代では、仕事における希望感がやはり重要視されている。一方、30歳代以下で見られた消費分野との一定の関連性は薄れ、代わりに地域・交流分野において総合的希望感との結びつきが見られ、その関連性は家族分野を上回っている。(図9)

50歳代でも仕事分野が最も重要視されているものの、40歳代と比べるとその関連性はやや薄まっている。また、家族分野との関連性が強くなっており、各階層で唯一50歳代において、家族分野との関連性が第2位となっている。家族分野における個別項目をみると、結婚や育児についての関連性が高くなっているが、これは子世代に対する強い関心の表れととらえることができよう。また、健康分野における老後の健康との関連性の高さも、この世代の特徴点である。(図10)

図9 福井県(40代)の希望感に関する意識構造モデル

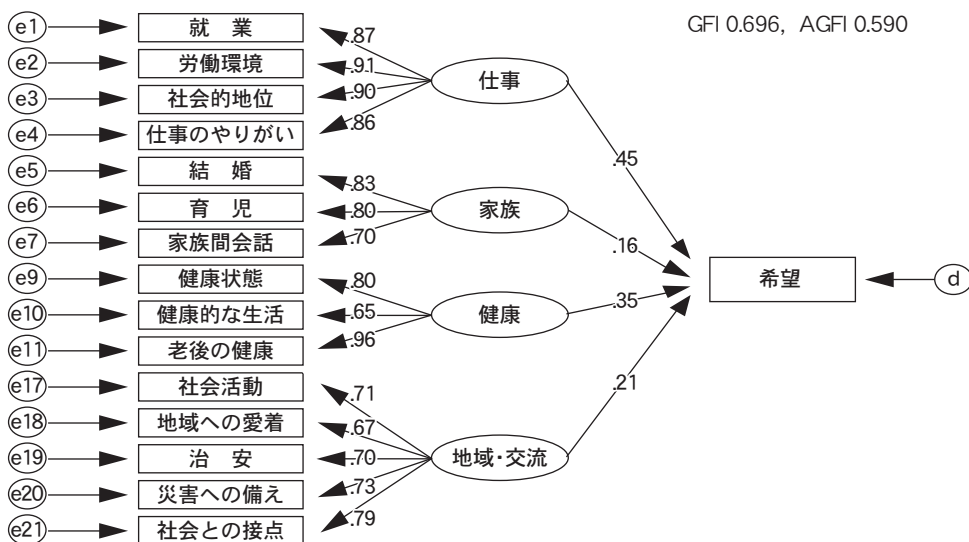
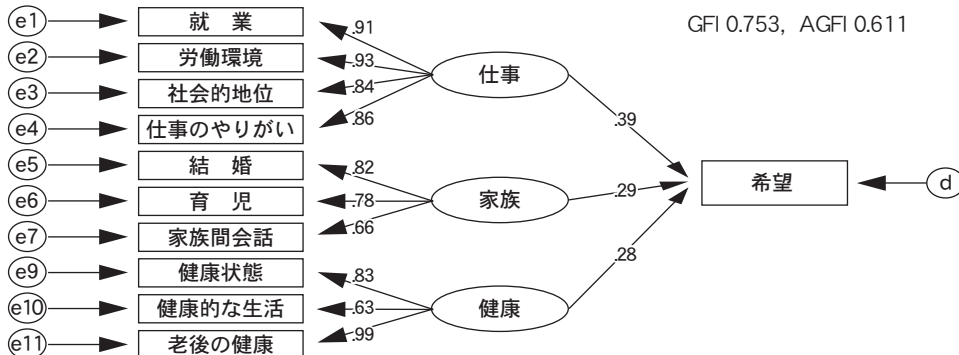


図10 福井県(50代)の希望感に関する意識構造モデル



60歳代以上では健康分野の影響が最も強く、次いで仕事分野となっており、50歳代と比べてこの比重の順番が逆転している。また、家族に関する総合的希望感との結びつきが50歳代ほどは高くない。健康分野における個別項目をみると、健康状態が強く意識されており、この傾向は年齢階層が上がるに連れて強まっている。一方で、50歳代と同様に、教育のほか、地域・交流及び消費分野との関連性は低くなっている。なお、今回の調査では70歳代以上において十分なサンプルが集まらなかったため60歳代以上という大まかな年齢階層での分析となっていることに留意が必要である。(図11)

世帯構成別にも様々な特徴があらわれているが、その中でも単身世帯が特に留意すべき属性である。単身世帯は前章のクロス集計で分析したように、総合的な希望感が突出して低くなっている。その上で、どのような分野が希望と結びついているかをみると、仕事と健康分野が並んで強い影響度となっており、その次に消費分野が重要視されている。一方で他の属性で一定の位置づけを示していた家族分野が、単身世帯においては総合的希望感との関連性が薄くなっている。このように単身世帯は他の属性とはかなり異なる傾向にある。(図12)

図11 福井県(60代)の希望感に関する意識構造モデル

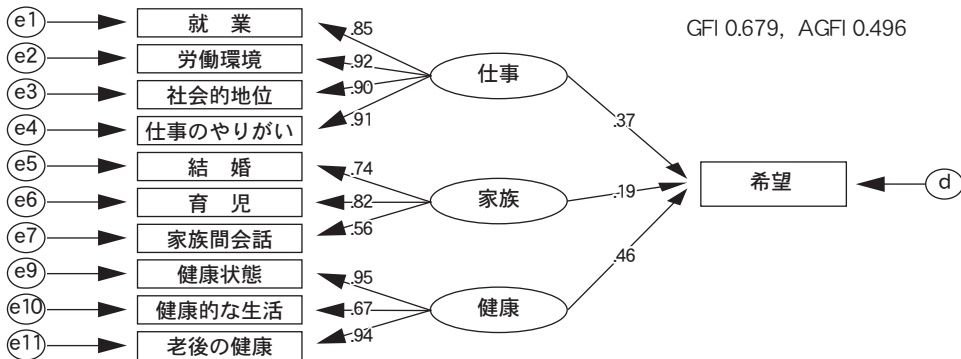
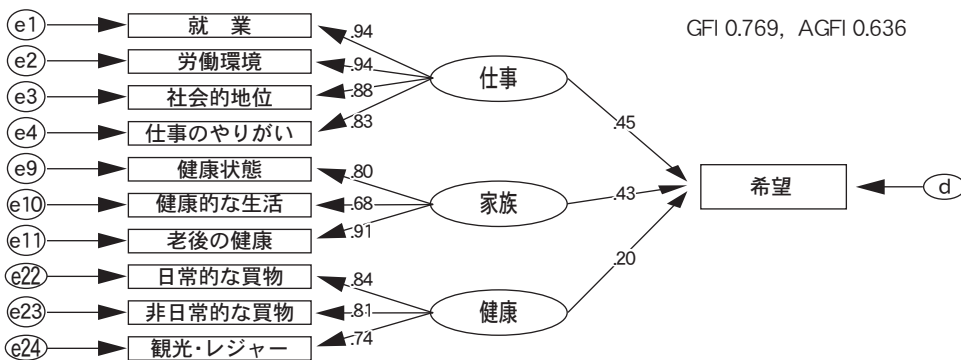


図12 福井県(一人暮らし)の希望感に関する意識構造モデル



### Ⅲ. 分析結果の考察

分析結果は次の5点にまとめられる。若干の提言も含めて以下に記す。

#### 1. 将来の希望感は今現在の幸福感をかなり下回っている。

現在の幸福感についての平均値は4.41であるのに対して、将来の希望感の平均値は3.54とこれを大きく下回っている。本研究ではこの差異について深い調査・分析を行っていないが、希望に向かう具体的な何かがないもしくは実現不透明であるという理由が考えられる。

既に福井県においては、幸福ではなく希望に焦点を当てた施策研究がなされているところであるが、この幸福感和希望感との違いを踏まえた具体的な施策が必要である。幸福度ももちろん重要であるが、希望感により響くような分野を定め、そこへの重点的な取り組みが求められる。

#### 2. 希望感を構成する分野の軽重は、首都圏と福井県とでやや異なっている。

希望感の分布をみると、首都圏と比べ福井県は格差がより小さい地域であることがうかがえる。また、総合的希望感との結びつきは、福井県が、健康→仕事→家族の順、首都圏では仕事→家族→健康の順となっている。

福井県は、健康であることを希望の第一条件に据えているようである。このことを踏まえ、健康関連の希望感を一層上げるべ

く、健康長寿に関連する更なる取り組みが求められる。

#### 3. 希望感を構成する分野の軽重は年齢階層別に異なっている。

総合的希望感に対する20～30歳代における健康分野の関連の強さと消費分野での一定程度の関連、40～50歳代における仕事分野での強い結びつき等が特徴点としてあげられる。このほかにも年齢階層によって総合的希望感に強く影響する分野、あまり影響しない分野に差異が生じている。

生まれ育った時代背景、現時点で置かれている状況、そして今後のライフステージの違い等により、各年齢階層によって希望感の意識構造は大きく異なっている。ターゲットとなる年齢階層を可能な限り明確にしたうえで、効果的な取り組みを行っていく必要がある。

#### 4. 単身世帯の希望感は低い。また単身世帯の希望感の意識構造は他とかなり異なっている。

単身世帯における希望感が他の世帯構成類型に比べて著しく低くなっている。またその希望感の意識構造は、家族分野の関連性が低くなっているなど、明らかに他の属性とは異なった傾向を示している。

福井県においては大都市部に少し遅れる形で単身世帯の増加が進行している。福井県の大きな特徴点である三世代同居や共働き世帯の多さを踏まえた施策展開も重要であるが、今後増加が見込まれ、また希望感

において厳しい状況下にある単身世帯に目を向けた施策展開が、より一層重要になるものと思われる。

#### 5. 教育分野は総合的な希望感との関連性が比較的薄くなっている。

教育分野は、総合的な希望感との関連があまり強くないという結果になった。このことは、結婚や育児が一定の時期に限定されることや、希望感との直接的結びつきにくいものであるということなどが影響していると思われる。また、福井県の子供の学力は既に誇るべきレベルにあるため、これ以上の上昇余地が小さいという意識もあるかもしれない。

これらも勘案した上で、福井県にとって希望感の向上に結び付くような教育のあり方を引き続き検討していくことが望ましいと思われる。

#### おわりに

今後、同様な研究を進めるにあたっては次の3点が課題としてあげられる。

第一に、東日本大震災を受けた希望感に関する意識構造の変化についてである。激甚な被害をもたらした上に、原子力発電所の事故は多くの国民に大きな意識変革を生じさせたため、3.11前後で大きく生じたこの変化をとらえていく必要がある。

第二に、調査手法や共分散構造分析のさらなる精査である。前述の通り、様々な制約から本調査における標本の構成は母集団を適切に代表しているとは言えず、回答者

によってパーソナルな質問とインパーソナルな質問に受け止められることによる問題を改善するためにも、多くの標本を集めることが可能な調査手法が求められる。さらには、本研究は異なる属性間での比較を主眼の一つとしていることもあり可能な限り同条件で行ったため、共分散構造分析の個別のモデルにおける適合性評価にはやや低いものもみられたが、モデルの修正等による追加的な精査も有効と思われる。

第三に、希望感の意識構造に関する総合的な研究への昇華である。本研究はアンケートによる意識調査とその共分散構造分析を中心としたものであり、他の定量的あるいは定性的な分析を加えた複眼的な分析もまた有効であると思われる。

最後に、本研究は、地域貢献研究事業「希望感の意識構造についての共分散構造分析と、希望感を表す新指標及び新指標から見た本県の実態・課題に関する調査研究」の成果の主要部分をとりまとめたものである。関係各位に、ここに心からの感謝の念を表して謝辞とさせていただきます。

#### 【参考文献】

坂本光司・幸福度指数研究会（2011）『日本でいちばん幸せな県民』株式会社PHP研究所

豊田秀樹（1998）『共分散構造分析＜入門編＞』朝倉書店

豊田秀樹（2007）『共分散構造分析[Amos編]』東京図書株式会社

田部井明美（2001）『SPSS完全活用法 共分散構造分析（Amos）によるアンケート処理（第2版）』東京図書株式会社

東大社研・玄田有史・宇野重規（2009）『希望学[1]希望を語る 社会科学への新たな地平へ』東京大学出版会

注)

- 1 坂本光司・幸福度指数研究会（2011），株式会社PHP研究所
- 2 豊田秀樹（1998）「共分散構造分析＜入門編＞」朝倉書店
- 3 東大社研・玄田有史・宇野重規（2009）「希望学[1]希望を語る 社会科学への新たな地平へ」東京大学出版会
- 4 インパーソナルな質問（回答者の一般的な態度や判断を聞く）であっても，回答者の置かれている立場によって，パーソナルな質問（回答者自身のことを聞く）と捉えられる可能性がある。これは結婚環境，育児環境の他にも，就業環境，労働環境，仕事のやりがい，初等教育環境，高等教育環境でも同様である。
- 5 ウェブアンケートでは回答すべき質問に回答していない場合，その標本を受け付けないのが一般的であるため，欠損値が一切生じない。